



月刊美術 2018年11月号

特集 美術団体展の「超」新鋭

光風会 結城唯善



《空の影》100F 油彩 2018年

結城唯善

「光風会」

見る人の夢想や瞑想に繋がる絵を

Tadayoshi YUKI



ゆうき・ただよし

1990年東京都生まれ。2010年光風会展初入選（光風奨励賞受賞）、日展初入選（以降毎年入選）。13年光風会会友推挙。14年武蔵野美術大学大学院油絵コース修了。16年フジテレビドラマにて木村佳乃氏の肖像画を制作。17年光風会会員推挙。個展、グループ展多数。現在、光風会会員。

展示予定 11月21日～27日・「美人画の未来III グループLoutle展」(阪神梅田本店・大阪) / 2019年5月25日～31日・個展(銀座かわらそ画廊・京橋)

常に文展、帝展、日展の中核として発展し、穩健と品位のある会と評されてきた光風会。今回の特集で唯一同会から登場するのが、1990年生まれ、武蔵野大学大学院出身の結城唯善。2017年に27歳の若さで同会の会員に推挙された超新星だ。結城にとって光風会は、日本の美術史と自身の制作を結ぶ場であるという。

「美大のアトリエでひとり制作していた頃、美術史と自分とのあまりの隔たりに、どうしたらいいのか分からなくなり、画風も二転三転しました。光風会は外光派の流れを汲む団体が百年以上の歴史があります。会には、師弟関係によって途切れることなく受け継がれたものが今でもあり、それを師の教えから得たとき、先人の精神や技術、向上心だけでなく、生きたひとつの美術史のようなものを感じるのです」(結城)

自身の制作に関しては、「見る人の夢想や瞑想に繋がる、生活の中に潜む夢のような部分を抽象するような絵を描いていきたい」と画家。日本の洋画史の中核を担う光風会を足場に、若き作家は自身の制作を一步一步前に進めている。